

土 淨



昭和十年五月二十日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認雜誌) 第三五二号
昭和四十六年十一月二十五日印刷 昭和四十六年十二月一日発行

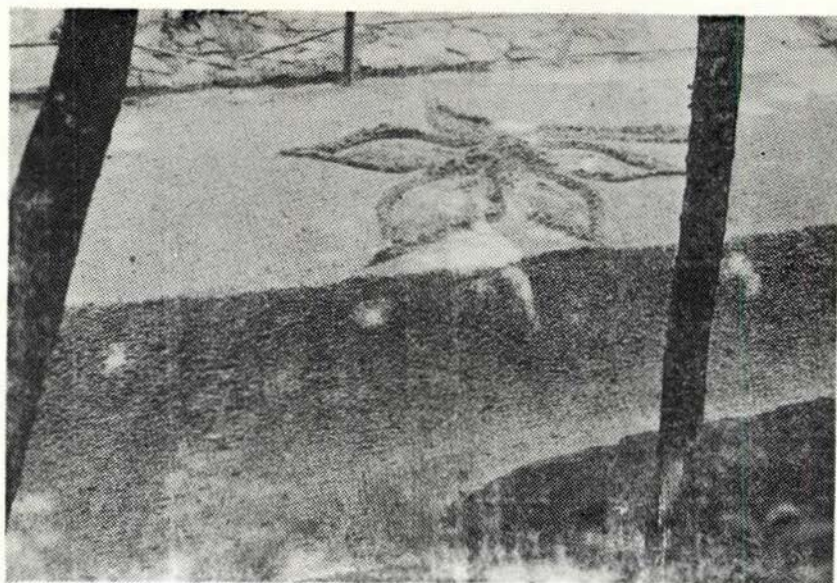
第三十七卷

第十二号

1971

12

十二月号



目次

表紙「爐」松涛達文画

成道会によせて

永遠に生きる釈尊……………上 田 貞 雄………… (2)

「さとり」とは……………宮 林 昭 彦………… (3)

和順のころ——会館落慶式に詣でて…………… (5)

特集「仏教と人生」

仏との出遇い……………加 藤 辨三郎………… (8)

仏教とわたし……………長谷川 よし子………… (10)

仏教と私……………三 田 全 信………… (13)

望みある明日のために……………水 野 善 朝………… (15)

昭和法然上人伝② 勝尾寺の生活・入寂…………… (18)

浄土歳時記《しわすの巻》……………若 林 隆 光………… (20)

孝子善之丞物語⑤……………吉 田 光 覚………… (22)

〈浄土文化講座より〉謡曲と仏教……………田 中 允………… (24)

韓国仏教の外国に及ぼした影響〈下〉……………鄭 学 権………… (27)

「道」和歌山への道……………高 橋 良 和………… (30)

浄土宗の古刹を訪ねて(京鹿ヶ谷法然院)……………佐々木 洋 之………… (32)

念 声 和 語



＜ 撮 取 さ れ る ＞

お能で面を着けるときは、両手で差し出された能面をそのまま持ち、顔の方を近づけて能面の中に自分の顔を押し込んでいくという。能面を着けるのでなく、この私を能面の中に没入し、私自身は無心になり、能面の人になり切るのである。それで初めて能面の人になって、舞台上で私を離れて自然に舞うことができるのだそうである。

「私はこの時、これが撮取されるということだと思いました。自力を捨て、能面の中に没入し、後は他力のままに能面の人となるのだと思いました。弥陀の願力に総てをまかせて、弥陀と一つになるのと同じで、無心になって舞台上で動くのです。」

土岐善曆先生は、お能の羽衣を舞った時の感懐を、このように語られた。しかし、撮取されるまでには、それなりの努力も必要である。

「羽衣一つを舞う為に、私は十カ月練習をしました。喜多先生に何度も同じところを注意され、寝床の中でも、手足を動かして、復習しました。そして舞う当日は、もうこれ以上は、能面に撮取され、無心で舞うだけだと腹できめました。」

この述懐も土岐先生の言葉である。撮取されるまでの絶えることのない努力、撮取されてからは、すべてをまかせる心、これが本当の撮取の意味なのであろう。その境地にいたると極めて自然に舞うことができ、又間違ひもしないともいわれた。最早や自然の心境であり、行動である。それは、孔子が、「己の欲するところに従って行動しても、わくをはずれることがない」と言われた心境と同じである。

撮取について法然上人は、

「一念なお生まる、いわんや多念をや」

と言われて、一念でも撮取されると信じて、念仏に勤むべきことを教えられている。能面に撮取される時まで精進するのである。

(安居)



= そ の 1 =

「成道会」によせて

永遠に生きる釈尊

上田 貞雄

(鎮西学園高校校長)

釈尊は永遠の真理をみづから悟り、世のすべての人に伝えんとした大人格者であると同時に大教育家であった。真理には不合理な迷信的要素がない。二千五百年の昔、釈尊はすでに迷信を排除したのである。

我々は人間の力を過信し、かすかな迷信に頼りがちである。しかし人間は自然にあるものを利用して生活に役立つものを作るけれども、自然そのものを作り出すことはできない。絶対に手の届かない世界のあることを知るべきである。

馬を川の岸に連れて来ても、水を飲もうと思わぬ馬に水を飲ませることは出来ない。馬どころか人間は自分の心が思うよ

うにできず日々争い、怒り憎しみのなかに過している心のある。水を飲まぬ馬でも水を飲まずにいられぬようにするのが大切である。馬に水を飲ませるのが仏である。人間として永遠なるもの消えざるものを求めしむるのが仏である。ままだにせんとするからままにならぬので、逆にままにしようと思わねば、何でもままになると思う。人生五十年の生命にこだわって永遠不滅の生命(真理)のあることを忘れてはならぬ。

釈尊は自ら永遠なるものを求め得て、自ら永遠なるものとして輝いている。これを教えるのが仏の道である。

明 石 慈 海

(東京都江戸川区在住)

= そ の 2 =

「ざとり」とは

仏教に関心をもっている或るアメリカ人が「キリスト教と比べてみて、仏教の特色を一口で云うならば、それは「悟り」を説くことである。」といったのを聞いたことがある。なるほど、キリスト教では、「悟り」という言葉はあまり用いられないようであるが、仏教はしきりに「悟り」を説く。それでは悟りとは、どう理解したらよいであらうか。

「柳は緑、花は紅」という句がある。この句が、実は「悟り」ということを説明する場合にしばしば用いられる。寒い冬が過ぎて、暖かい春が訪れる頃になると、柳は緑に芽ぶき、花は紅に咲く。悟りとは、この自然の事実を、そのまま把握することにはすぎないのである。緑のものは緑に、紅のものは紅と見ることが悟りであるというのである。わたしたち

は、いつまでも物をそのままに見ているかというかと決してそうではない。ある立場からある立場によって物をみている。

「花は紅」といえば、なにかあたりまえの分りきったことであるが実はこの花の紅をそれぞれの立場から限定してみているのであり、いずれの立場からも制約されない花の紅をみていないのである。いうなれば、花の紅である事実をそのまま見ていないのである。悟りとは、そのままを見ることを教えているのであり、そのままを見ることは、見るものが花そのものになって見るより見方のないことを教えているのである。

「柳は緑、花は紅」ということは、柳になって緑を見ることであり、花になって紅を見ることであって、柳や花を対象としてながめるということではないのである。悟りを経験してから、いままで見てきたものと違ったものの見え方がしてきたということは、ある立場からしてある立場による見方から離れたということである。しかし、わたしたちは、このある立場からは容易に離れることはできないばかりでなく、この自分の立場を、しばしば固執するのである。

かように悟りとは、あらゆる立場から、あらゆる制限をこえようとしたものであるということができよう。

仏教とか、キリスト教という場合、それぞれの立場はまぎ

れもなく異にしている。もちろんその立場は混同してはならないが、この立場を一遍越えて、その上にみずからの立場を知らなくてはならない。

人間の問題として、悟りということを考えてみた場合、仏教は、人間が人間であることを越えて人間であることを自覚するところにある。もっとも人間そのものが何であるかが非常にやっかいな問題ではあるが、たとえ自己の把握が困難であるとしても人間を離れることができないことからすれば、等閑視するわけにはいかない問題である。

一般に、人間が悟って仏となるとよくいわれるが、その場合、仏という絶対者は、人間からみれば超越者であるが、人間が仏となり得る点からすると、その超越者は人間の外にあるのではなくて、内にあるのであり、仏という絶対者は人間を離れては存在するものではない。

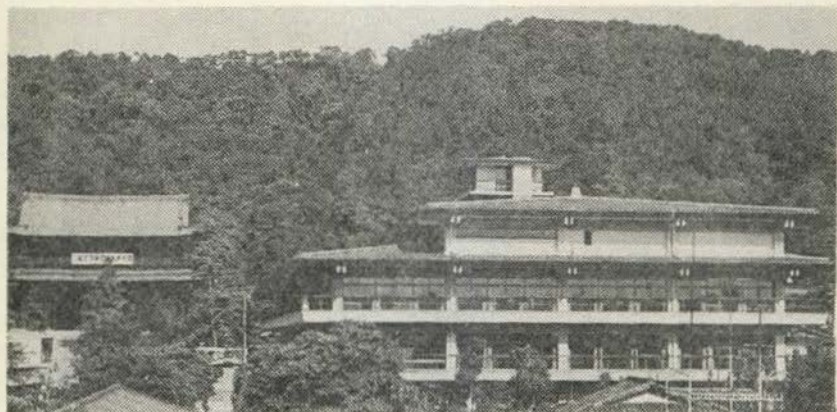
現代人の大きな苦悩は人間不信というところに原因があるような気がする。人間は、もっと自己を信頼していいものであることを知ることが大切である。人間が仏になるということは、人間の能力を過信するというのではないが、人間が人間を越えて人間になることを教えているのが仏教であるという理解と仕方は、現代において重要な意味をもつ。人間が人間である自己を信じきれないとしたら、これくらい悲惨な

ことはない。

しかも現代の生活をみてみると、まことにめまぐるしいほど忙しい日常である。一面には忙しく活動することは大事なことであり、人間は忙しうに喜びと楽しみを求めていることも確かである。ところが反面、この忙しいということが、だんだんわけもなく忙しくなろうとしている。機械のようになるとぐるぐる回っている状態が続いており、じっとしていると人間の歯車がとまるような焦燥を感じ、休んでいるときでも、忙しい思いをしないと落ちつけけないのが現代人ではないであろうか。

落ちつかない忙しい人間に落ちついて、静まるようにさとして、なかなか落ちつくものではない。落ちつかないものは、落ちつかない自分をとらえきわめて、それになりきることである。そのときに、初めて落ちつかないものが、落ちつかない前の自分とちがった自分をつかむことができるのである。仏教は自分を自分ではつきりつかむことを根本のおしえとしている。それがつかめたら、それは悟りということができよう。念仏の道は、自己中心的な考え方の人間を越えた人間を育てるものである。それは生きているという自分が生かされているという自覚にたちかえることであろう。

和順のころ



《会館落慶式に詣でて》

恵まれた自然のなかに、歴史の伝統としずもりを感じる京の町は、外人の訪れも多く賑わっていた。遠くにみえる比叡の山も、近くの東山一帯の峰にも、晩秋の気配が漂っている。

祖山知恩院の山門をくぐりぬけて急斜面の階段を登ってゆくと、その両側の樹木はすでに紅葉に色どられて苔のみどりに映えて美しい。階段を登りきってあとを振り向くと、山門の向こうに、近代的なモダンな和順会館の偉容が望まれる。しかも、山門と会館のコントラストが見事に調和している。

昭和四十九年には、宗祖法然上人が浄土宗を開創されてから、丁度八百年を迎える。その記念事業の一環として信徒の研修道場としての会館が建設されたのである。その会館が和順会館と命名されたのは、いうまでもなく、昭和三十六年法然上人七百五十年御遠忌のときに、宮中より和順大師の称号を勅賜されたのである。それは、無量寿経下巻に

「天下和順し、日月清明なり。風雨時をもつてし、災厲起らず、国豊かに民安くして、兵才用いること無く、徳を崇め仁を興こして、務めて礼讓を修む」

とある文の「和順」に由来している。まさに、和順大師の諡にふさわしい、法然上人のお徳と人柄である。

その昔比叡山での血みどろの修行ののち、専修念仏こそ大衆救済の大道であることを確信された法然上人は、師匠叡山上人に暇をつけて比叡の山を下られたのである。山を下りて、はじめは西山の広谷に住まっておられた。広谷は現在の粟生の光明寺の後方にあたる処である。しばらくしてから、東山大谷に庵を移されるのである。上人は、西塔黒谷を出られてから、御年八十歳でお亡くなりになるまでの四十年間、晩年、四国にご流罪になられる間を除いては、ずっと京都で生活されている。賀茂の河原屋、小松殿、北白川二階房、嵯峨二尊院などに住されたと伝えられている。しかし大谷での生活がいちばん長く、ここで上人は生涯を閉じておられるのである。

御伝によると、東山大谷にあった法然上人の建物は、中の房、東の新房、西の旧房の三つの房であったといわれる。このうち、中の房は、西山の広谷から移した法然上人の庵室であり、現在の知恩院の御影堂は、そのあとに建てられたものである。法然上人を慕う人びとが増えてくるにつれて、西の旧房、東の新房などが建てられ、信徒や門弟の宿舎も建設されたことであろう。西の旧房は、下の房ともよばれ、知恩院の山門の西南の地にあり、東の新房は上の房ともいわれて、現在の大鐘樓の東北の辺にあったのである。

法然上人時代のご生活をあれこれ思いめぐらし、法然上人に導かれ、念仏によって救われた善男善女の随喜の涙にくれたすがたを偲びながら、念仏の声が東山にこだました八百年前を瞑想していると、大殿から流れるコーラスの声に、ふとわれに帰った。和順会館の落慶法要が音楽法要によってすすめられたのである。

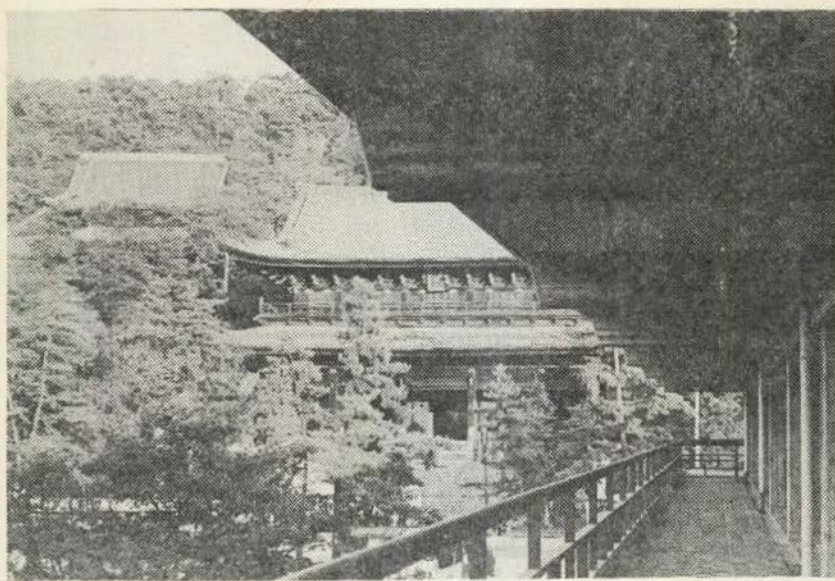
いまささぐ、このみあかし、まことの道を、あかしたまえ

このひかり とわにたえず、つたなき歩み、てらしたまえ

法然上人この地に浄土他力念仏の法門を開かれてから八百年の星霜、法然上人のみ教えを聞く現代的なすがたをここにみて、思わず合掌するのであった。やがて、岸門主親下の表白が朗々と、響いてくる。

「……元祖大師法然上人広く浄土の要門を聞き給いしより、以来吉水の法流は瑞々として今に伝え、称名念仏の声洋々として四海に漲り、現当二世の洪益万民を潤す。今や時代の進運に伴い、大いに教化の面目を新たにし、教化振清、思想の善導に資せんと欲し、和順会館の建設を志す……」

まさに表白の通り、現代という時代認識の把握のもとに、



——和順会館より三門・御影堂をみる——

元祖上人のみ心を生かし伝えんがために、新しい教化のセン
ターとしての和順会館の役割と意義が存する。地上三階、地
下一階の超近代的な壮麗な和順会館は、名のごとく和順大師
のみ教を生かす研修の道場である。鶴飼隆文知恩院執事長は
「この会館を真に生かすためには単に信徒の宿屋としてでは
なく、求道、もしくは研修につながる施設としなければなら
ない」といつておられるが、新しい革袋に古き酒をいれて腐
らせるのではなく、芳香ゆたかな滋味あふれる新しい酒が盛
られなくてはならない。

光明は限りなくそそぐ、限りなき命に生きよ、人間の知
恵勿たのみそ、み恵みは、人ぞ扱ばず

ただたのめ阿弥陀仏と おしえたる いみじさの 我らが
祖師や

知恩院コロ・フロラの奏でる音楽的リズムのなむあみ
だぶつ、なむあみだぶつの称名のおと、最後に歌われた、こ
の佐藤春夫氏作詩の法然上人頌は、心のおくふかく響きわた
るのであった。法然上人を讃仰し、こよなく上人を慕いつづ
けた詩人の心が、聞くものを通して、元祖上人の慈悲のみ心
に導きつないでくれる。

晩秋の京は肌寒さを感じたが、心ほのぼのと温まる会館落
慶式の日であった。

特 集

仏教と人生

加 藤 辨三郎

(協和醗酵株式会社会長)



私との出遇い

私は、仏と出遇うまえに、まず「人」にであつたのであります。それは、一面から見ますとまったくの偶然なのですが、あとから考えてみますと、なんともありがたいご縁であつたともうすほかはありません。仏のおんみちびきと思わずにはいられないほどでございます。

私は、大正十二年に学校を卒業し、すぐある醸造会社に就職しました。そこでは、最初味噌の造りかたなどを研究し、のち、工場長に昇進させていただきました。そして、昭和十二年に、その会社から他の関係会社へ出向

を命ぜられました。この転勤命令こそ、私がやがて仏に出遇う機縁となつたのであります。私が求めたのではなく、他からの命令によってそうなつたのです。ここがひじょうに大切な点だと思ひます。それだからこそ、私は、この転勤を仏の発遣とも感じ、また、如来の招喚ともうけとるのであります。

この出向のおかげで、私は、野口喜一郎さまというひじょうに熱心な仏教信者の部下となりました。野口さまは、松原致遠先生を毎月会社へお招きして、私たち社員

に仏教講演を聞かされたのです。これも、いわば命令であります。最初のほどは、それを聞くのがいやでなりませんでした。はらだたしくさえ感じたものです。ところが、六、七年後のある日、私は、この松原先生のおはなしにひじょうに感動したのであります。感動というよりあわてたといったほうが適切かもしれません。ほんとうに、足もとがガラガラと音をたてて崩れるようでした。先生は、その日、大我と個我についてはなされたのです。仏教の根本の旗じるしである「無我」の解説であつたと思われまゝ。このとき私は、いままで、おれがおれがと思つていたその「おれ」は、かげろうに過ぎないことを知つたのであります。これは、私にとって完全な自己崩壊でありました。私は、この瞬間、仏教を聞かなければならないと気づいたのです。それからは、私は、先生の講演会が待ち遠しくてならなくなりました。仏教書も、しきりに買いあさりました。そして、だんだんと、仏教の基礎知識がわかつてまいりました。なるほど仏教は深い教であり、どこにもすぎまのない哲理であると認識したのです。

しかし、そこまではききましたものの、浄土の教、とくに念仏のいわれ、すなわち仏の本願というものが、どう

してものみこめませんでした。諸行無常や諸法無我是、道理としては私によくわかり深く頭を下げたつもりでした。また、仏教が窮極においては涅槃に至る道を説いているらしいことも察しがつきました。けれども、どうして念仏を称えなければならぬのか、そこが私にはわからなかつたのであります。とうとう私は、松原先生ご在世中（先生は昭和二十年逝去）には念仏称えるまでには至りませんでした。まことに先生にもうしわけない限りでございます。

ところが、そのような私にも、遂に念仏称える日がきたのです。それはもう、おん催しにあづかつたともうすほかはございません。年月日も、なにが直接の動機であつたのかも、まったく思い出せません。ただ万策尽きた思いであつただけが記憶に残っています。念仏がさきに出て、出たあとでハッと驚いたようであります。

ともあれ、念仏が私の口から出たということが、私にとつての根本的な大変革でありました。ここではじめて浄土教が何を教えているかが私にわかつてきたようです。仏に遇つたという実感ではありませんけれども、私には念仏よりほかに行く道のないことだけははっきりわかりました。そういう「私」であることを自覚したので

す。じや、自覚させていたのだとうすのが正しいでしょう。もはや、仏がどうの、浄土がこうのとあげつらう必要はなくなりました。私に、自覚を促し、念仏もうさせたのは私自身でないことが明らかであります。

こうして私は、なぜ法然上人が「もろこしわが朝にもろもろの智者達の沙汰し申さるる観念の念にもあらず、また学文をして念のこころを悟りて申す念仏にもあらず」と仰せられたのか、そのおこころもちにふれることができたと思うのです。また、「往生極楽の道」が何を

意味するかもほのかに感じられるようになりました。

「往生極楽の道」とは、一般的にもうせば「涅槃への道」でございましょう。現に、法然上人ご自身も、「選釈集」の中で、「速かに寂靜無為の楽（みやこ）に入ることとは必ず信心を以て能入となす」と教えてくださっています。もっとひらたく受けとるならば、それは、真に心の平安を得る道だと思えます。私は、この法然上人の仰せを深く信じます。それも、じつは念仏を称えてはじめてひらけて来た信なのでございます。

仏教とわたし

長谷川 よし子

（大乗淑徳学園理事長）



(1) 仏との出会い（動機）

私は幼い頃から寺に育ったので、おとな達が仏様に合掌拝したり、読経することなどを見てもそれは生活の一部であって、別に不思議とも、特別のことだとも思っ

たこともなく過していたのに、小学校一、二年生の頃であつたらうか、私の寺に五重相伝が勤まり自分も本堂に入つておとなしく座つてお話を聞いていたが、何日目か、その時の勤戒師であつた山崎弁栄聖者が一枚の墨絵を黒板に掲げて真剣にお話をなさつていた。自分にはその意味は殆んど理解出来なかつたが、その絵が今でも臉の奥深く刻みつけられ消えない程に有難く私の心を打ち、子供心にもあれ程強い感動を受けた事はなかつたので其後も時々思い出すことがあつた。それは観音菩薩さまが上の方をふり仰いで仏様を念じていられる姿、観音菩薩に抱かれた子どもが安心して、乳房を求めているかのようなお姿の絵であつたと記憶している。やや長じて字を思い出し考えてみると、至心信樂、慈悲我國と書いてあつたようだ。泌々とその絵がなつかしく、その当時、仏様はお母さんのような方なんだな、と思つた。墨絵は單なる絵像ではなく私の心を強くとらえ、それからは何となく仏様が有難く、親しく、仏様の前では前とちがつて生きた方と對話する思いで話すことができた。それが仏様との出会いと云うか、白紙の私にお与え下さつたお光明は素晴らしいものであつた。

(2) 信仰の必要性

(信仰体験を通して)

そんな事があつてからは、悪い事をしたり、嘘を云つたりすると、仏様の優しいお顔が厳しく私を叱つていられるように見え、子ども心にも今度からはきつとやめましよう、と心に誓つた事が度々あつた。そんな中にも歳月は過ぎ、やがて心の動揺の多い思春期がやつてきた。淋しくてならない日、無性に腹がたつ日、家の誰彼なしに何となく反抗をしたい時、今のうちに、遊びでまぎらわすなどのけ口は勿論なく、只々悶々やる方ない、やりきれない日が毎日のように続いた頃、母が見かねたのか、私に別時に行くように勧めたが行き度くなくて又反抗したい、然し、こんな気持ちで家に居るより家から離れた方が又良いなどと考へて出かけることにした。本堂では真剣な念仏の声、われんばかりに木魚を打つ音、一時はその氣にのまれたようだったがまだ多少の抵抗があつてそれ程熱心になれないうちに二日程が過ぎ、三日目に自分でもわからない程の真剣さが躰のどこから湧

き出てくるように感じられ、木魚を打つにも声を出すにも想像を絶するようなものがあつた後、突然のように止め度なく堰を切つたようにほとばしり出る涙をおさえようもなく、泣けて泣けてたまらなかつた。悲しみとはちがつた涙、やがて人目もかまわず声を上げて泣いた。

「水の滴り微なりといえどもようやく大器に満つ、さんげせざれば深ますます深し」み仏の救いによつて懺悔させて頂けた喜び。帰途の心身の軽いこと、雲の上を歩んでいるかのように感謝にみちみち、誰にでもこの幸せを語りかけたい、この喜びを知らせて上げたい、飛び交う蝶にも、野に咲く花にも、そして花も蝶も私に何かを語っている。ささやかながら自分の体験を通し、若し自分に信仰がなかったら今頃どうなっていたかと思うと空恐ろしい。この幸せにめぐり合えた事を感謝しているのである。世の中には己の不幸を人のせいにし、他人の幸せは喜ばず不幸の座に引きずり降したい、そんな人達に遭遇することがある。どんな知識人でも無信仰の人程不幸で哀れなことはないと思ふ。然し又信仰なんて自分が無力だから、自分に自信がないから何かにたよりた、すがらずにいられないからだ、などと自信に満ちたかのように傲慢な態度の人程度し難いものはない、こん

な人達をどうすればよいのか？

(3) これからの仏教に期待すること

今日のこの混迷の社会に、惑う人達の心の傷を癒すものは宗教以外にない。斯く思う時我々仏教を奉ずる者の役割は大であると共に期待も大きい。高遠な教理や論説も必要であるが先づ日常の生活の中に仏の教えが生き、生きた仏教が必要なのである。あの人の云う事なら聞いてみよう、やってみようと納得のいくような生活態度が人々を引きつけ、自分の心の悩みや、現実に取り来る環境からの諸問題も、一つ相談してみよう、と相手の心を温かく包んで呉れるものが説く人の中に欲しい。

私達は「互いに生かされている」ことにめざめ、互いに尊敬しあい、感謝の気持ちをもちあつて合掌の姿で生活したいものである。わかり易く云うなら「有難う」の生活とも云える。最もわかり易いがなかなかこの言葉はそう簡単に云えるものではない。おれがしてやった、おれがえらい、自己中心的な生活を反省させ、本来の姿に多どす事ができたら、仏数の大きな役割が略果せた事に

なるが、是は難中の難である。然し難かしいと云って捨てておくことはできない。総ての人々が互いに心から「有難う」と云えるように努力することが現在の仏教に



入信の動機

信仰というものは、なかなかつかめるものではない。これは昔も今も変化はないであろう。あるとき法然上人にどうしたならば入信出来るかと尋ねた人があった。上人は三宝に祈誓せよとお答えになっている。私も若い頃このことについて煩悶した。ある高德の方に尋ねた時、その人は高僧伝を読めと教えて頂いた。私は研究の必要

仏教と私

かけられた使命であり又期待でもあって、「浄仏国土」「成就衆生」の理想境到達への道であるまいか。

= 仏教大学教授 =

三田 全信

から自然高僧伝を読まねばならなくなった。そうして高僧の精神生活に触れる機会が多くなった。現今物質文化は異常なまでに発展をとげているが精神文化は寧ろ退歩しているように見られる。私が仏教と経済という新しい方面に興味を覚えて高僧伝を見ていった。私が感銘した話を紹介しよう。江州に周察（一七六七）という僧がいた。この人は檀家からの信施物をことごとく貯蓄して寺の修繕にあてていた。ある時檀家総代から和尚は弟子も大勢あることだから少しは遺金をのこしておかれ

てはと忠告された。その時周察は、これはもつての外のことである。弟子に遺金を与えることは在家とちがつて毒を与えるよりも無慈悲なことである。道心さえあれば衣食は足りるので、道心を養うことが私の役目だと答えたという。私はこの言葉に感じた。子のない私は一寺住職としての現在、弟子はあつても道心なく利養を求めて出寺する。エコノミックアニマルは寺院にまで波及するのかつらつら情なくなる。

道を求めて

法隆寺の佐伯定胤老師は或時青年僧から食えなかつたら仏教もないと聞かれたとき、食えなかつたら「死ね」と仰つたということである。これは極端なように聞えるかも知れないが、仏教は精神を尊重する立場から失われる精神に一喝を与えられたのである。現代では誓願などという言葉も聞いてもピンと来ない。誓いなど守つたためしはない。願などという肩のこるようなことは過去のことと感ずる。だが精神ほど大切なものはないのである。巨万の富も忽ちに失なわれる。昔から金持三代続か

ずともいう。戦後に失われた精神教育は社会のあらゆる面でショックな事件を起している。私は独身の若い頃、田舎の貧寺を持つよう師命を守つて住職したけれども、自分は何をすべきかという使命観に迷つた。その頃から学問へ心を傾け、もつと多くを知りたいという念願に燃えた。それでも早それ以外には生甲斐はないと思いつめ、発願して正月元日から午前零時起床水垢離祈願をやつた。七日間やつたが終に風を引いて中止せざるを得なくなつた。大願成就という終末ではなく風を引くという悪い結果になつたけれどもその間に得た強い信念がブラスになった。これから堪えられないと思うような苦しみも堪えてゆけるようになった。老いて眼疾と心臓病に悩まされた。永観律師は『往生十因』という自著の序文に「病は善知識なり」と書かれている。生か死かの悩みほどつらいものはない。一切のものが無になるか有になるかという瀬戸際に立つてものを考えると全く異なつたものが見える。もし失明したならばという仮定に立つて暗黒の世界を考えると精神世界のことがよくわかる。そして心眼が開け信眼が展開する。南無阿弥陀仏と平易に口にしてはいたが、命がけて阿弥陀仏に帰依する意味が身にしみてくる。夜半起きて念仏すると、物欲や名誉欲や愛

欲の世界から離別することが、どれほど悲しいことか又淋しいことか心の底をうつ。そしてそのお念仏こそ最も頼もしいものであるかがわかる。

これからの仏教



望みある明日のために

水野 善朝

(長野県立工業高校教諭)

物が豊かになって、心が貧しくなったのがこのごろの世相であるといわれる。それでは物が不足した戦時中は、心が豊かであったかといえ、かならずしもそうとはいえないであろう。いつの世においても、人の心は、流動的で、豊かにも貧しくなるもの。

社会状況によって組織、制度、建築等大いに変化するであろう。現代文化を代言したような「家つきカーつきババぬき」といったような物欲偏重の精神を、和順と慈悲と誓願の本来の仏教精神に取戻さなければならぬ。これをさらにつづめるならば一切唯心造すなわち仏教の心の教育ということになろう。失なわれゆく仏教の「心」なるものを取返さねばならぬであろう。

では、なにを尺度にして、心の豊かさや貧しさを計量するのか。わたしは、その標準となるものは、やはり宗教心であると思う。

その宗教心とはどんなものか具体的に表現し得るのは、仏教の中に流れている精神のかずかずによって、可

能であると思う。

わたしは、毎日、高校生と接している。定時制であるから、日中は職場で働き、夜は疲れた身体を教室に運んでくるからである。かれらの中には、ときどき、何のために働き、何のために生きているのか、わからなくなるといふものがある。これという確かな理由もないのに、学校を長期にわたって休んでみたり、また時には、家出を試みる生徒もたまにはある。平穩無時の日々が、かえって耐えきれないものを、感じさせるのだ。要するに生きがいの問題なのである。

今の自分にとって、何が生きがいなのか、わからぬのである。

かれらは、よく働く。そして、それ相当の報酬を受けている。わたしが、十五年前、初めて教職について得た初任給の、数倍する額を、中学を卒業して、二、三年目のかれらが収入として得ている。がっちり貯金しているものもあり、どんどん消費しているものもある。だが、共通点は、いずれも目標が車にある点である。

排気量の大きいバイクを、免許もとらぬうちから買いこみ、毎月、一万円余の月賦を払いつづけているものがあるかと思えば、十何万もするステレオを買いこんで、

やはり月賦に追われているものもある。そうかと思えば、今まで乗っていたバイクを止めて、自転車通学にきりかえるものがある。どうしてかときけば、貯金するためだという。急に、浪費家が勤勉な貯蓄家になったのかと感心するのは早い。そろそろ、普通免許をとれる年齢に達するので、車を購入するための準備だという。

かれらにとっては、バイクや車が何よりの魅力であり、生きがいになっているのだ。それを、笑ったり軽べつするわけにはいかない。今のかれらには、せめて、そのような目標でもなければ、他に求めるべき目標が、差し当って見つからないのである。かれらは、車のために働き、車のために貯金し、バイクでスピードを出す喜びを走らせて、通勤通学をしているのである。かくて、かれらは、日本の自動車や二輪車業界の一翼をになっているというわけである。

何の目標もたぬものに比べれば、車という目標をもっている生徒は、まだ倅せといえる。しかし、そこでとどまってしまうのでは、何ともさびしい限りである。もっとほかに、精神的な目標をもってもらわなければ、この人の世の中は、明るくならない。

特 集 仏 教 と 人 生

今の日本は平和だという。たしかに、戦争はしていない。しかし、戦争のないことが即平和といえるだろうか。

戦争がないおかげで、日本の産業界は繁栄したが、一方、国中にあふれる自動車は、一日平均五十名近い人の生命をうばっている。これは、日露戦役のときの戦死者の数に、迫ろうとする数字であるときく。交通戦争といわれる所謂である。わたしは、人間が、人間そのものの手で、或は人間が作りだした品物の力で、他の人間の生命をうばう現象が無くならない限り、平和とはいえないと思う。

仏教の根本的な戒め、五戒の一つ、不殺生の言葉が、痛いほど頭にひびいてくる。

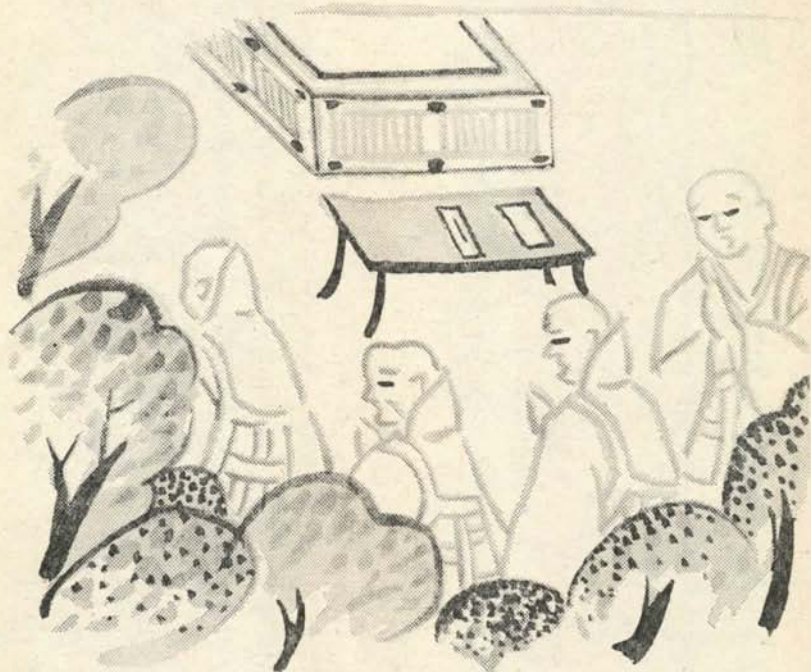
さて、生きる目標をもたぬ人間に、生きがいを感じさせるには、生きがいの何たるかを教えなくてはならない。わたしは、それを、アミダ仏と本願の思想を基礎において、考えている。

第一に、自己の生命をよく見つめよ。そして、その生命が、どこからきて、どこへ去っていくかを考えよ。すなわち、先祖から子孫への流れの中の、自分というものを考えてみよ、ということ。

第二に、自己の生命は、何によって、どういうかたちで支えられているかを見よ。社会の一員として生きていられるということの意味を考え、生かされているという考えにまで及ばなくてはいけないということ。

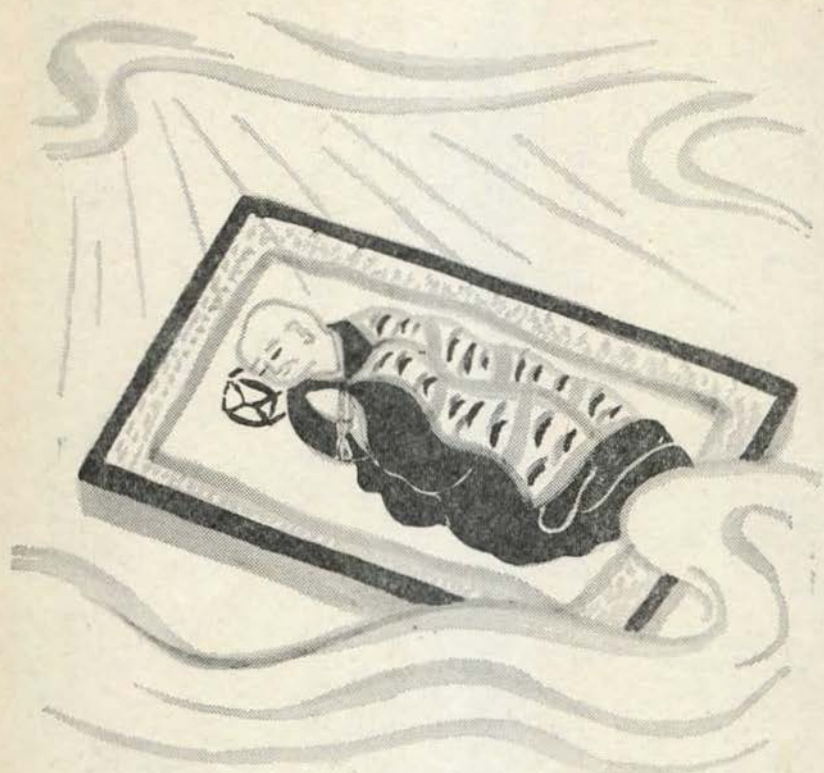
第三に、右の二つが本当に理解されれば、おのずから、自分は何をなすべきかに思い当り、それを成し遂げようとする誓いをもつべきであるということ。

一つの誓いがもてれば、生きがいは自らわいてきよう人に生きる力を与えるもの、それは仏教に他ならない。なればこそ、仏教を現代に生かすことを期待してやまない。



勝尾寺の生活(23)

承元元年（一二〇七）十二月八日、法然上人の配流は免ぜられ、一年たらずで四国を離れることになったが、京都に入ることは許されなかった。そのため押部で教化をしたのち、摂津の勝尾寺西の谷の草庵で四年間の生活をおくられた。この寺で恒例の引声念仏（いんせいねんぶつ）を行ったとき、寺僧の法衣が破れているのを見た上人は、留守中の指導者であった弟子信空に命じて法衣を寄進させ、また自分の『一切経』も寄付したという。京都との距離はかなりあっても、師弟間の心は近かった。経済的に恵まれた上人の生活状態がうかがえる。



入 寂(24)

建暦元年(一一二一)十一月十七日、上人は勝尾寺を後に京都東山の庵室(知恩院)に着かれた。長い間の旅疲れに老病も手伝い、翌年の正月二日から病床につかれた。弟子たちは一生懸命看病につとめたが、二十日ごろには庵室の上に紫雲がたなびき、道行く人々も方々で奇瑞を見た。二十三日、上人は源智に一枚起請文を授け、二十四日には往生の近づいたことを弟子たちにつげ、また参議兼隆や真清なども夢じらせがあったという。こうして二十五日、念仏のうちに上人は往生した。庵室の西方に作られた御廟に参詣する信者は日増しに多くなった。

浄土歳時記

へしわすの巻

よき人の仰せをこうぶりて、おこがましくも浄土歳時記などというものに筆をとらせて頂いてから、早八月となった。仰せのほどはこの月までとあったから、師走以後は走らないですむ。元の杳阿弥となつて、枕が高く出来るわけである。

しかし歳時記とはそもそも何であらうか。花が季節をたがえず、冬の日差しの中に来春の蕾を堅く準備しているのを見ると、人間がカレンダーを眺めては、さあ大変もう何の仕度をしなくちゃ間に合わないなどと毎年うろたえつづけているのが、何か万物の霊長（この頃あまりはやらない言葉だが）とか日本的靈性などとおさまりかえっているのと、うらはらな感じがしないでもない。むしろ自然を詠ずる詩人が歳時記とか季節などを思いついたときに、自然との訣別が始まり、歳時記が形を整えた時に、人間は自然を忘れ、生命の根源としての自然が人間を見捨てる悲劇の幕が開かれたといえない



こともない。自然に還れなどといわないまでも、自然がなくては、生命を維持していけないことを痛感させられつつある昨今ではある。しかし更に思えば自然は決して人間を見捨てたわけではなく、いつも暖かく見守ってくれるのに、人間が忘恩の徒になり下つたといった方がより正しいであろう。今日も窓外には枇杷の蕾は寒風に耐えて来る年の備えをし、木蓮、辛夷は来春幾つ花を咲かせるか、今から数を示すことが出来る態勢にある。寒いといっても梅の花芽の凍る程ではないし、しばらくといった処で、桜の葉芽の水枯れることもない日本にいて、人間だけが四百四病を倍にふやして間にあわない不健康と不健康感にさいなまれているのは、何としたことであろう。平均寿命が延びたということは、無自覚なうちにこの世を去っていた乳幼児死亡率が低下したことであつても、生命を惜しむ成人死亡率が極端に低下したわけではな

（浄土講院大學舎松二
職住院光西草）

光 隆 林 若

く、まして寿命の延びたご老人方が余命の長くなった分だけ、不満足な生涯が長くなっただけとあつては、有難味も薄いといわねばならない。そして自然の一員としての個体の存在であることを知らず、知らされず、忘れて育った若い人たちが、人間と対立して存在するものとしての自然しか知らない假に、より無関心になるとしたら、その結果は正に肌えに粟立つ思いである。台風も大水も、大雪も長雨も、少くともわが国では、被害の面からだけではなく、ましてや歳時記の季節としてではなく、取上げられるようにならなくては、真の正しい生き方があるまいと思われる。これで無罪放免という安心からか、思わず前置きが長くなったが。

さて。

お念仏のご利益、ご功德の多々あることは承りますが、何が一番のご利益でしょうか。

本当ですね。わたくし達も法話の折などにお念仏のご利益のお話をよく致しますし、またそういうお話が喜ばれるような世相でもあります。お念仏の一番最高のご功德は何なのでしょうね。世の中の風潮が金銭万能とか、享楽追求の方向ばかりとっていますと、ついそれに迎合するわけでなくとも、宗教の方も、それを布教の手段に使い勝てです。「日本靈異記」という一〇〇〇年以上も前の書物にも、お金のもうか

る話とか、美女を授かる話などが出てくるのを見ますと、ああやっぱりと思わされますし、新興宗教の人達が、そういうことを掲げて、上手に大勢の人を引き入れるのを見聞きすると、ふらふらつとこちらにもそれに誘われそうにもなります。でもそういう風潮が世界中を公害というもつともらしい名前の、私害、我害でおいつぶそうとしていることも確かです。

お念仏のご利益は、直接我慾の満足をはからなくてもよい人間にして下さること、それが人間の正しい生き方だと気付かせて下さることではないでしょうか。皆が自分は正しい、相手は間違っていると言いつつしまつてはばからない世界で、若しかしたら間違っているのは自分かも知れませんというのは、とても勇気のいることです。自分だけが正しいのだという方が実はどんなに楽なことか知れません。その中でお念仏に生きる人だけが、若しかしたらといひ始める勇氣を持てるのです。そしてその見方に立つことが出来た人だけが、実は真の幸福に一步近付けるのだと思います。それがお念仏の一番のご利益であり、それを知らせて上げるのが、念仏信徒の最大のご功德だと思います。では皆さまご健勝に、よいお年をお迎え下さい。

孝子善き事物語

第五回

吉田光覚

(岩手県紫波・極楽寺住職)

一 地獄遍歴

善之丞は下へ下へと下りゆくこと二百里ばかり、真黒な岩石の高山にあたる。中腹に二丈余の老婆、白髪膝まで垂れ片肌を抜ぐ。口は耳の際まで割け、上下の牙くいちがう形相で、罪人をにらみつけるさま身の毛もよだつほど。

数人の獄卒、全身の毛つるぎの如く逆に生ゆ。身から常に焰が上るところへ大音声で呼ぶため罪人共は震い上る。そのとき獄卒が罪人を一人残らず横倒しにして爪を立て、両方に引裂けば、頭から足までめりめりと皮がはがれたのを、足で鞠のように蹴上げる。数万の罪人虚空に飛び上り嵐に木の葉が散乱するのと同じくである。

その中の一罪人、善之丞に近づいてひれ伏し、「我は四年以前、死んだ下人の久五郎で昼夜限らない苦を受けている。念仏の追善を頼む」と血の涙を流す。

閻魔王宮にゆく。大王の側に束帯の官人百人、末座に長身の獄卒大勢、鉄杖を持って居並ぶ。一人一人の生国、氏名を呼び悪事を挙げる。

大王の脇に鏡三十三面あり。一生の悪事残らず鏡中に写る。善之丞その鏡をみれば、子供の頃、近所の悪友に誘われて畑から豆を盗んだのが写っているのに驚く。

地藏尊が閻魔王の前で何やらささやくと、一人の官人、奥から桃果のようにやわらかな紫色の玉を渡す。それは地獄を通る印璽であった。善之丞は片手に其の玉を握り、片手は

錫杖に取すがって種々の地獄を遍歴した。

糞泥地獄にゆく。糞泥の中から一罪人、苦しげな表情で告げる、「父、善四郎が母である。地獄の苦患耐えがたい。頼むところは子孫の弔いだが、善四郎は邪見で仏法をせしり、つい老年忌法要をしたことがない。命日に肉食さへしている。お前、世に帰るなば此事を語りきかせ念仏供養して苦患を敗つて呉れば、自分も悪趣を免がれよう。善四郎の病氣も治癒るだろう」と。

それから熱湯地獄を経てゆくに、猛火さかんに燃える。其の火中に罪人啼叫んでいる。地藏尊仰言るには「父善四郎だ。罪業深重の故に命未だ終らないが、魂先立つて悪趣に墮してかかる苦患をうける。自業自得せひないことだ」と。ここで責をうけるため老婆の姿まで大悪病にかかる。お前帰ったなら父に此の事を知らせよ、随分に懺悔念仏さすべし。念仏の供徳でなくては、どんなに養生するとも快復はしない。

その外、等湯地獄に一人、糞湯地獄に一人、善四郎の外、生存の者四人をみた。然るに年内に三人死んだという。善四郎一人、念仏の

功徳で病氣もやや回復しかけた。こうして地藏尊に従つて、地獄を一巡し閻魔王宮に帰れば、印璽を返せと言われ、娑婆の土産にと思つたがそれも成らず、印璽を返して王宮を出た。

二 極楽の巻

それから再び地藏菩薩の錫杖に取縋つて蓮台に乗り、地獄へ下りた距離の倍も上へ上へと登って行くと、金色の大山に現わる。虚空から白光の糸幾千筋となく下っているのが見



える。山中に白装束の端正な人々大勢いて、みんなその糸に取付くと糸が自然に縮み上る。中に糸が切れて落ちる者がいると、菩薩がすぐ救いあげて元へ戻す。落ちた原因は娑婆で念仏の疑心深かったため一端娑婆へ帰すのだが、三年後には必ず往生が遂げられると。極楽浄土の寂初門―大門へと進む。

大門の中段に無数の菩薩方如意を持たれて並び給う。今、往生されたばかりの聖衆同行を迎えに來られたのだと。

まもなく阿弥陀如来の御來迎に会う。聖衆に問まれ褒響幡蓋をかざし、微妙の音楽を奏し、往生人を乗せた観音菩薩等、東門より入り来る。この辺りは浄土より出玉う方、お戻りの方々で往来絡繹として繁華な市のようなと。惣じて菩薩のお姿は長い髪を後に垂れ薄い衣のいと美わしきを百重ねも着られたようだが、下膚悉く透き通つて見える。その外、七宝の瓔珞金銀球玉もて身を飾り端正殊妙なる言わん方ない。

第三の門を入れば浄土の地広大無辺で涯知れない。地平かなること大海の如く、先明四方に輝き地の色瑠璃にして金輪際まで透き通つて見える。金銀水晶魚鱗の如く數並べ、その間々から細く柔らかな紫の糸生じ、とりどりの美しい花降りしきる。道は金銀の繩で蛛蜘蛛の網の如く境界を分つ。一足踏めば心身爽快、二足歩めば薰香をかき、三足目には音楽きこゆ。宝樹あり。大さ三里、半より下に金の網かかれり。其網に七宝の風鈴幾千万ともなくかかつて、風に随つて妙響出で、千百の音楽を一度に奏するよう。諸の枝毎に衆宝莊嚴の宮殿ずらつと立並ぶ。

宝池のはとりで初めて往生の女人をみる。池の底には種々の宝を砂として敷満ち、きりぎりすに似た宝虫の鳴声感にたえて面白し。上品と下品との間柔い草あつて花咲き匂う。三歳程の小児合掌し跪いておる所へ菩薩方お菓子を持ってこられ、童子の頭を撫でて、微笑し、よくお念仏申してここへ來たと愛らしくほめて居られるのも目についた。



第十回「浄土文化講座」より

第九回「浄土文化講座」は、去る十月十五日（金）、東京駅鉄道会館ルビーホールにおいて開催された。今回の講師は増上寺における伝宗伝戒（浄土宗侶になるための修行の際、加行僧に毎回木綿供養（如法衣）をされている田中家の方、青山学院大学教授田中允先生である。講題は「謡曲と仏教」であったが、これは前月号の特集「芸術と仏教」において神泰純先生が、同じ題名で具体的な内容にふれて謡曲を解説されたものと重複するが、当日の講演は謡曲の構成など、この基礎的な知識を知るために格好のものであった故、謡曲を更に理解していただきたく、この要旨を綴ってみた。

「謡曲と仏教」

青山学院大学教授 田 中 允

私の長い研究生生活、ことに謡曲に関しては仏教の知識なくしては語れない部分が多くございます。「八宗綱要」などはまず読ませていただきましたが、生の仏教に触れるため、その理解に苦しむ折は、古くは石井教道先生、そして宝田正道先生に教えを請いながらまいりました。私共がうんちくを傾むけている謡曲に関し、専門外の人に関する話しを聞きますと、まことに参考になる場合がありますが、本日は仏

教に門外漢の私が、中世謡曲にあらわれた仏教を語るという時、同じ論法で、何かお役にたてばということで、以下話しを進めたいと思います。

まず謡曲を語る時、五つに分類して説明されておりますので、この分類にしたがって順次述べてみることにしますが、この五分類の前に番外として翁（おきな）というのがあります。これは「翁三番叟」で知られるような、国土安穩五穀豊

饒を願う祈禱的なもので、劇の体裁をなしていないことより、舞踊組曲と呼んでおります。

① 脇能物（わきのうもの）

これは前の翁の脇で演ぜられることなり、この名があり、祝言で一貫している。したがってその中心は神であり、その威高を示す曲が多くある。水波の喩えの通り神仏融合の考えを持ちながら、現世は神、来世の幸福は仏という考えのもとに、こうした祝言ものでは仏教はほとんど出てきていないのです。現在演じられているこの脇能物四十曲のうち二曲のみに僧がワキとして登場している。

② 修羅物（しゆらもの）

これはいうまでもなく仏教思想にもとづいているので、現行十六番のうち僧が登場しないのは二番のみである。これといえども阿修羅の苦しみにせめられるのを仏教によって救うということより、すべてが仏教ものといってもよいのである。この多くは「平家物語」よりその題材を求めているが、もちろん武將たちが死してのち地獄に落ち、阿修羅の苦しみにあえぐ姿を演ずるのが主であるが、その武將が戦った様子を幽霊が登場し、再現してみせる。「平家物語」や平家びわで一般庶民におなじみの源平の武將が現われ、どのように軍をしたかが演じられるのであるから、これは今日私たちがテ

レビなどによって時代ものを興味深く見ると同じような、演出効果があったものと思われる。

③ 霊物（かつらもの）

これが謡曲の中心となるもので、歌舞幽玄ものといわれる。能は歌舞が主となってドラマが作られているが、歌といっても音楽だけでなく音楽も含み、舞も舞楽のような象徴的なものだけでなく写実的なものも含んでいると解釈していただきたい。また幽玄というところ何と奥深いところにあり、つまみにくいもののように感じるが、能の大成者世阿弥は美と柔和が幽玄であり、それは公家のたたずまいのようなものであると表現している。そして幽玄な美しさを歌舞という媒材をもって表現するのが能の本質となる訳です。そこでこの霊物は女が主人公となり、歌舞を演ずるものが多く、この意味から謡曲としては一番単純なもので、ただ観客を気持ち良い雰囲気（きんき）にひたらせ得ればよいという場合もある。現行四十一曲のうち仏教関係のものは三十二曲である。

④ 雑物（ざつもの）

これは前三つと後の鬼畜物に含まれないものをいい、以下の四つに大別される。

(イ) 狂乱物——子や夫に死に別れる様を演じるもの。

(ロ) 現在物——現在生活している人が登場することよりこの名

がある。能では普通面を使用するが、現在物は原則として面を使用しない、直面（ひためん）といわれるものである。しかしこの場合でも演者は直面が面であるということより、笑ったり泣いたりはいらない無表情でなければならぬのである。

(ハ)遊舞物——魘物の歌舞幽玄よりも劇的な面を加味したもので、外国ムードの舞を舞うものとして、中国の楽（がく）に模して舞うもの、あるいは神の威光を示すものとしての神楽舞などが含まれる。

(ニ)幽霊物——これは幽霊が歌舞幽玄を舞うとか、地獄に落ちた武將を演じるというのではなく、幽霊が成仏しないでこの世に執着心をもっている様を演じるものである。これもまた次のように分類される。

A、執心もの——執着心が割に軽度のもの

B、怨霊もの——うらみがかなり深いもの

C、悪霊もの——公然とうらみの対象にあるもの

⑤鬼畜物（きちくもの）

主に鬼が登場するものである。現代人は鬼というと思い、鬼のと考えがちであるが、決してそうばかりではなく、良い鬼もあり、この意味では神仏と似かよったものである。ただ宗教の裏付けがあるか否かが異なっているものである。意志を

持ったもので、人間にはない神秘的なものともいえましよう。畜生としては狸々（こじこじ）獅子（しし）といわれるもので、デホルメされたものと考えればよいでしょう。この外早舞物といわれる人間の登場するものもある。これは光源氏であるとか中将姫というような、品のよい人物の登場による舞である。この早舞とは、中世ではただテンポが早いというのではなく、専門的にいいますとりのりがよいということで、演技がスムーズに氣持よく演じられるものをいうのである。この鬼畜物は主人公は人間であるけれども、今いったところの鬼的なムードがあるということから、最後にふさわしい雰囲気を持ったものであるということ、最後に位置されているのである。

以上謡曲を大別し説明した訳ですが、全体をみなすと、脇能物が仏教を異分子としてとり扱い、現在物でドラマティカルに演ずるということより、遊舞物で外国ものや神楽を演ずるということより、仏教的な色彩がないが、その外はほとんど仏教色で統一されているといえましよう。

《この外講演では謡曲と仏教のふれ合いの具体例として自然居士のくだりについて話されましたが、誌面の都合で割愛いたします。》



鄭 学 権

(大正大学大学院留学生)

韓国佛教の外国に及ぼした影響

△下▽

宋に対して高麗では、京氏周易占十卷と黄帝鍼経等を送った。特にこの黄帝鍼経は宋帝の勅旨で世に頒布した。そして劉向説苑二十篇の反質篇が佚書になっていたのを高麗の完本から借りて充当した。

また高麗光宗時代に当時中国では佚書になっていた別紋孝経一卷・皇靈孝経一卷・孝経雌雄図三卷・孝経新義八卷等を後周に提供した。そして中国では歴史編輯についても、数回にわたって高麗から史料を借りたのである。宋遼金史の編輯においても高麗から借りた宋遼金三國(蹟高麗所蔵)がその史籍補充に大きな貢献をしたことが知られている。

次に高麗仏教界において、なによりも特筆すべきことは大藏経彫印のことである。これは世界史上の一大驚異

的事業であり、人類文化史上の一大努力の結晶でもある。その経板もそのまま残っている。この大藏経板は現存する世界最古のものであり、最大最善のものである。現に海印寺に保存されているのは八万一千一百三十七枚でほとんど欠板がなく完全なものといえる。今から約七百余年前の彫板としては、高麗大藏経板以外には世界にその類をみるできない。

そしてこの大藏経板が東洋仏教圈に及ぼした貢献は莫大である。そこでこの大藏経を刻板した事情を考察しながら、その外国に及ぼした影響を考えてみよう。

高麗の大藏経の刻板は一回だけでなく、前後二回にわたっている。第一回は、顯宗(第六代)時代から始まり、宣宗(第十三代)初年迄には完成されたであろうといわ

れる。この初板大藏經は章疏類を入れていない經文だけであつた。この大事業が顯宗時代から着手されたのは、どういふ理由であつたらうか。

顯宗初年に契丹が大挙侵入して退却しないので、顯宗は無上大願を発し大藏經板を刻彫して『諸仏聖賢三十三天』の加護を祈願した。これがその主要動機であつた。また顯宗は自分の考妣の冥福を祈ることをもかねてこの刻板を発願した。そしてこの初板は其の後高宗（二十三代）十九年に蒙古兵の侵入により焼失したのである。

次につづいて、所謂統大藏經板の一大刻板事業がある。これは古今の仏教諸宗の章疏を集め正文大藏經を補遺するために発起したものである。この事業は大覺國師義天（第十一代文宗の第四子で名は照・字は義天）の発願で完成した。大覺國師はかねてから諸宗の章疏を集成し經典の微旨奥義を闡明する意図をもっていたが、宣宗二年にひそかに宋に渡りあまねく名山大利の高僧大德をたづねて、帰国する際には諸宗の經疏一千余巻を將來した。そして國師はこれでも不足であるとして、当時國內に潜藏していた經疏を探索しながら、遠く遼・宋・日本にまで探訪の手をのびし、ついに『新編諸宗教藏總錄』を完成した。この中に記載された經疏は実に一千一部四

千七百四十巻である。そして、一方では興王寺に教藏都監を置き、四千七百四十巻に達する大部の藏經を刻板した。この國師の統藏と顯宗の正藏を併せて、ここに東方仏典の結集がついに完璧の域に達した。

次に第二回目の藏經刻板の大事業に關してのべよう。この高麗藏板は最終のものであり、同時に最完美の集大成で、今海印寺に保存されているのがそれである。

前述したように、初板は焼失したのであるが、この第二板は高宗三十八年（一二五一）に完刻した。刻板の動機は、顯宗の時と同じく、仏力の加護を祈り外敵を退散させる大發願で始つたのである。當時は仏教が盛行していたが、仏教以外の迷信も広く民心を支配していた。しかし外敵退散のためには仏力の加護を祈ることが第一であつた。たまたま蒙古の侵襲を受けた王宮及び寺刹では、華嚴神衆道場・天岳神衆道場・消災道場などがさかんにおこなわれた。この仏力加護を願う信仰心がついて世界的珍宝である大藏經板の出現をもたらしした。そして、この大事業遂行にあたつては、江莘に大藏經都監を置き、晋州に分司都監を別置して、前後約十六年間をついやして完成したのである。それまでの中国大陸における大藏經開板には誤謬が多かつたので、それを正して仏旨を闡

明しようとするのも、この藏経開板の目的の一であった。この高麗大藏經板は現今の世界の最古最大のものであるのは勿論、その内容においても高い価値を持つものである。

高麗藏本の流通についてみれば、日本では後宇多天皇（高麗忠烈王時代）のときに、はじめて高麗藏本が将来

されたといわれている。それ以後、高麗末頃から李朝初期にかけて、日本から高麗藏經を熱烈に求めたことは数十回にも達した。その結果、大宗から世宗に至る間に五、六回にわたって一部又は大部の藏經が日本に渡った。このような経過をたどって高麗大藏經の一本が芝増上寺にも藏されていることは周知のとおりである。

お 願 い

本年も残りわずかとなりましたが、会員皆様の平素よりの並々ならぬご支援ご助力を賜り、弊会も開宗八百年に向って、法然上人のお徳を讃仰するため、微力ながら種々な事業を行なっております。

今般、まことに勝手なお願いで恐縮でございますが、郵送料印刷費など諸物価騰貴の折、左記の通り年会費を値上げせざるを得ない状態に至りました。

意をくみとり、今にも増してのご理解ご鞭撻の程を、ここにお願ひ申しあげます。

記

一、年会費 一、二〇〇円（現行一、〇〇〇円）

一、すでに明年以降の会費を納入の方は会費切れをもって新料金にかえさせていただきます。

法 然 上 人 讃 仰 会

道

和歌山への道

高橋 良和

宗務庁の開宗八百年準備局から、一度和歌山県の海南市沖野の法然寺の調査に行ってくれないかという依頼をうけているが、また法然寺へは参上の機会をもていない。そのうちに一度伺って、法然上人についての伝説を調べたいものだと思っている。

なんでもこの寺の近くに法然田（ほねだ）という田圃の名も残っているらしく、まさしく法然上人の御遺跡であると思うのであるが、その外にまだまだほしい伝説があると聞いている。いづれそれは調査した上で書くことにしたい。

ところがこの和歌山県にもう一つ法然上人の御遺跡が残っている。この寺は和歌山市加太町大川の報恩講寺である。

この報恩講寺は、法然上人の二十五霊場のなか、第八番の霊場となっている。

この寺に残る伝説はこうである。

それは、讃岐の小松庄に配流になった法然上人が、やがてその罪を許されて、いよいよ京都にかえることになって、この讃岐の地から船に乗って大阪に向う途中、海上で台風に遇い流されて、船が難破し、漂流してついたところがこの加太であったというのである。

四国は島であるから、必然海路により大阪に向うしか所詮仕方がないから、難破のことはありうるが、もしこの難破が事実となると、一寸困ることが出来てくるのである。

伝説であるから、いろいろなものが出てきても決しておかしくはないが、もし船が漂流したということだと、四国からの帰路兵庫県室津の地に立ち宿り、遊女を化益し、その導きをうけた遊女の友君が死んだことを聞いて「しつらん、しつらん」といった、とある四十八巻伝のことに矛盾を感じるのである。

なぜなら四国から室津に立ち室った上、和歌山の加太に漂流ということはあり得ないことになる。

その外神戸市兵庫区川中町に元祖教会という教会も番外の霊跡となっているので、この地で戦争犠牲者の追悼会も修しているのである。

伝説であるから、諸所にあってもかまわないのであるが、陸路と海路という二つの道をめぐって、その真实性をはっきりさせることはむづかしいことである。

それはそれとして、この加太の地に漂流した法然上人は、油生賀浜（ゆうがはま）というところの上陸したので、その土地に上陸するとともに、たちまちこの地の有力者である孫右衛門が上人の導きをうけたといわれている。

村人たちは、法然上人の温顔を拝して、すっかり上人に帰依し、京都に帰ることをとりやめるようすすめたと伝えていく。

それで法然上は、村人たちの熱心なすすめをふり切って、京都に赴かなければならないところから、自ら姿を写して、御影をつくられたということである。そして自ら開眼して、村人たちにおくられたという。

そして自分の姿をつくった木材がまだ残っているもので、それによって百万遍の大念珠がつくられたのである。

このように村人を教化し、自分の像をつくって村の人たちに残したそのあとに出来たのが、この報恩講寺となっている。

この寺には、法然上人の筆といわれる、南無阿弥陀仏の番号や、恵心僧都伝という浄土曼陀羅も什宝として残っている。

この寺は西山浄土宗に属していて、和歌山における数少ない霊跡なのである。

法然上人がこの地に難破漂流したのは、承元元年（一二〇七）であるが、法然上人が四国に配流したのは、この承元元年の十二月である。そして勅免の宣示が出されたのは十二月であるといわれている。もしも遭難をしたのが真実であるとするなら、十二月のときである。

許されて勝尾寺への到着は承元二年になっている。

厳寒のときの漂流であるが、上人の身体に何の影響もなかったということでは本当にありがたいことである。漂流ということではなければ、この加太の地などへは、そう足も運ぶことがなかったのではないかと思う。

然し伝説は今もなお、この寺に生きている点で、上人との縁りは忘れてならないものがある。

あまり詮策しない方がよいのかもしれない。

浄土宗の古刹をたずねて

京鹿ヶ谷法然院

東山の縁を背に静寂なたたずまいの中にある法然院は浄土宗寺院としては一風異っている。黒塗の幾門から、しばらく樹林とよく調和のとれた石舗、石垣の続く山道、そして一段高く山荘風の茅門が繁林の中に、美しくつとりと落着いた風情をみせている。山門をくぐると両脇に清らかな砂盛が造され、枯山水を思わせる庭園である。いつ参拝しても掃除の行届いた境内に、一入心が洗われる。すがすがしい雰囲気をもっている。

山門前に「不許葷辛酒肉入山門」と刻まれた石柱が目につく。不浄物の入山禁止を示す禅宗寺院によくみられる、それである。しかし、れっきとした浄土宗寺院である。

法然院は善氣山万無寺と号す。知恩院三十八世支普万無が延宝八年（一六八〇）に創立

した。万無は増上寺還無に投じ修学、岩槻の浄恩寺・飯沼の弘経寺・鎌倉光明寺を歴往し知恩院に入山した高僧である。禅宗的要素がみられるのは二世忍淑上人の影響によるといわれる。忍淑は僧風が次第に廃頽し、戒律を守る者がなくなり墮落したことを嘆き、復興して僧風の革新を計ろうと願った。こうしたことが禅宗的なところをかし出しているのであろう。いわゆる浄土律院といわれる由縁である。その気風は今日も培かわれている。忍淑代には寺観も整備し、後には十八カ寺も末寺を支配するまでに発展した。

毎日、朝四時から午後十時まで六時礼讃の勤行が行なわれる。唐の善導が浄土往生の行儀として編んだ往生礼讃に節を付けた美しい礼讃である。本堂に入ると一瞬、他とは異つ

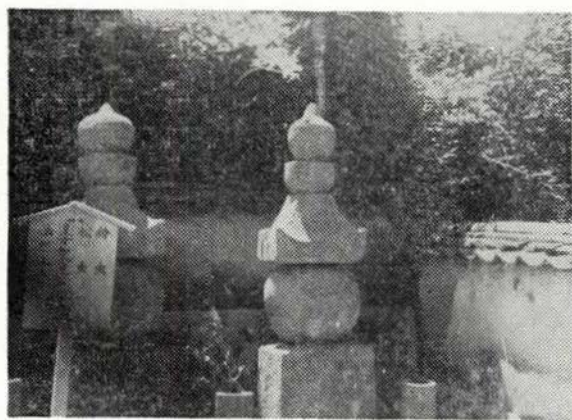
た荘厳さを味う。台座・天蓋のすみずみまで彩色がほどこされた華麗な阿弥陀如来が安置され、その本尊膝下には散華がため塗の壇上に映えて美しい。季節の花が二十五輪、放射状に献ぜられている。阿弥陀来迎の二十五菩薩になぞらえたところからであろう。

一二〇六年（建永元）、法然上人の弟子安楽・住蓮の二人は鹿ヶ谷において六時礼讃を修した。この二人の修する念仏にひかれた後鳥羽上皇寵愛の女官、松虫・鈴虫の二人は大内裏を逃れて黒髪を落してしまふ。熊野参詣より帰った上皇は、これを知り激怒し住蓮・安楽を斬殺、法然上人は土佐に流罪となった。法然院にまつわる代表的な逸話として、あまりにも有名な話である。法然院はそうした六時礼讃興行由来の遺跡に万無が創立したものであるといわれている。その歴史的事実はともかくとして、法然院の門をくぐり阿弥陀如来と対面するとき、なぜか六時礼讃が心に透りわたる、念仏を口にする。そんな極楽浄土を思わせる靈敏さを兼ね備えた寺院である。

（佐々木洋之）



法然院庭園内より
茅門を望む



松虫・鈴虫の墓
住蓮山安樂院に立つ

「浄土」購読規定

一部 定価 九十円

会費一カ年金一、〇〇〇円
(送料不要)

浄土 十二月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和四十六年十一月二十五日印刷
昭和四十六年十二月一日発行

定価 九十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行人 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人讃仰会

“御年始のご挨拶がわりにご利用を”

『浄土宝曆』

- ・ 一部 25円 (200部以上より 単価23円)
- ・ 送料実費 B6版 40頁

『修養日めくり』

- ・ 一部 100 円 送料実費
- ・ 用紙33枚 タテ37cm ヨコ13cm
- ・ 見本お申しこみは150円お送り下さい

東京都千代田区飯田橋1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-5944 番

“五重相伝の栞” 発行

浄土開宗八百年を迎え記念行事の一つとして各寺が五重相伝を啓修して念仏の信者をつくることが祖師への報恩行であります。

五重相伝の受者がその勸誡を聴聞するのに最も必要な字句のみを伝統の次第に依つて羅列した簡単な栞を今回発行をいたしました。勸誡師が黒板を使うかわりに、受者がメモをとるかわりに前以つて一枚つつ渡しておくこと便利であります。

また勸誡師が名刺がわりに受者に配布されても好適です。各地からお申込みを受けて大量に印刷いたしましたので五重相伝をお開きのご寺院に、また勸誡される布教師各位におわけいたします。ご希望の方に見本をお送りいたします。

タテ20cm ヨコ50cm 経本折一枚刷り 一枚二十円
末尾に五重相伝の会期、道場、勸誡並伝燈師名、受者氏名を記入するようになつております。

猶勸誡師用として住所氏名刷込みご希望の趣はお申し下さい。但し一〇〇枚以上にして下さいませ。 以上

〒381-12

長野市松代町東寺尾

長明寺 小布施 弘學

電 〇二六二七八一二五〇六番